

審査の結果の要旨

氏名 朴澤 泰男

高等教育が大衆化したといわれて久しいが、大学進学率にはいまだに厳然とした地域格差が存在しており、高等教育機会の地域格差の問題は、古典的なテーマでありながら、いまなお解明すべき重要な研究課題となっている。本論文は、この古典的な課題に対して、人的資本論をベースとした費用・便益の視点を導入することで新たな知見をもたらそうとする研究である。特に便益をとらえるために、地域レベルの変数を重視した独自の枠組みを導入し、また地方県同士の違いを重視した分析カテゴリーを活用し、県内進学と県外進学を明確に区分した分析を行うことで、地域格差の現代的メカニズムを再検討している。

論文は、研究の課題と方法を提示する序章に続き、本論6章、そして結論と含意を述べた終章、および補論から構成されている。第1章では、まず進学機会の地域格差の趨勢をデータから確認するとともに、県外進学が全体の動向に与える影響の大きさが示されている。第2章では、大学進学費用の検討を地域別に行い、進学費用全体が高い県ほど進学率が高く、費用のみから地域格差を説明することの限界が指摘されている。第3章では、前章をうけて費用ではなく便益に注目すべく、学歴間賃金格差と進学率の関係を検討している。分析の結果、賃金格差の小さい県ほど県外大学進学率は大きく、便益分析の有効性が示唆されている。続く第4章では、第3章の便益分析の結果を裏付けるために労働市場の地域的な相違を分析し、地方圏から大都市圏への県外進学が大都市での就職につながっていることを見出している。第5章では、性別によって事情が大きく異なる事実を踏まえ、女性の大学進学と便益の関係を分析し、就職においても進学においても女性が不利な状況に置かれにくい地域で進学率が高くなる傾向を明らかにしている。第6章では、各章の分析結果を踏まえ、マクロデータとミクロデータの双方を用いて、進学便益と進学率・進学希望の関係を多変量解析によって分析しており、それまでの諸章で明らかにされてきた進学と便益の関係がおおむね裏付けられる結果が得られている。終章では、これまでの知見を整理したうえで、そこから導き出される政策的インプリケーションを示すとともに、今後の課題を整理して論文を締めくくっている。

本論文は、従来の研究で費用の問題に偏りがちであった視点を修正し、便益を積極的に分析に取り込んだ独自の枠組みを用いた分析をおこなったところに高い独創性が認められる。便益分析の枠組みを精緻に展開するために、大都市圏・中間地方・外縁地方という独自の3類型を構築しているが、最終的にこれら3類型間の大学進学状況の違いが便益分析の枠組みによって整合的に説明されている。こうした知見は、従来この課題に取り組んできた高等教育研究・教育社会学研究を大きく前進させると同時に、今後の高等教育政策に対しても豊富な含意をもつ研究だといえる。膨大なマクロデータの整理も同時に行われており、資料的な価値も高いものとなっている。以上のことから、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分な水準にあると判断される。